

SHOW HEY シネマルーム

Data 2025-88

監督・脚本：アンドレア・アーノルド

出演：ニキヤ・アダムズ／バリー・コーガン／フランツ・ロゴフスキ／ジェイソン・ブーダ／ジャスミン・ジョブソン／ジェームズ・ネルソン・ジョイス

バード ここから羽ばたく (BIRD)

2024年／イギリス、アメリカ、フランス、ドイツ映画
配給：アルバトロス・フィルム／119分

2025 (令和7) 年9月13日鑑賞

テアトル梅田

👁️👁️ みどころ

私は本作の監督も俳優も全然知らなかったが、チラシに踊る「世界が大喝采！」と「世界の片隅で生きる1人の少女に訪れた魔法のような4日間 今までにない全く新しい〈青春物語〉」の「見出し」に魅せられて劇場へ！

冒頭で「驚異の新星！」と称される12歳の少女の父親への反抗ぶりを見ると、こりゃ『ウエスト・サイド物語』(61年)や『エデンの東』(55年)のような、多くの鬱積を抱えた若者たちの大人への反抗映画！？

他方、本作のタイトルはナニ？それは導入部に再三登場する鳥の姿を見ればよくわかる。さらに、森山良子のヒット曲『今日の日はさようなら』(66年)の2番の歌詞「空を飛ぶ 鳥のように 自由に生きる 今日の日はさようなら またあう日まで」を思い出せば、本作のテーマはきっと・・・！？

そう思っていると、ドイツ人俳優が演じる謎の男バードが登場し、何とも不思議な“寓話”に入るので、アレレ、アレレ。さあ、「世界の片隅で生きる1人の少女に訪れた魔法の4日間」とは？名作にケチをつけるつもりは毛頭ないが、こんな寓話についていくのは76歳の老人には到底ムリ！？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■前評判では大絶賛だが、本作は何の映画？■

本作のチラシには「第77回カンヌ国際映画祭コンペティション部門正式出品」の他、「第78回英国アカデミー賞(BAFTA)」等々の受賞歴が挙げられた上、「世界が大喝采！」の見出しが躍っている。しかし、それに続く見出し「イギリスの名匠アンドレア・アーノルド(米アカデミー賞受賞) 最高傑作にして新境地」も、「バリー・コーガン×フランツ・ロゴフスキ 映画界を代表する若手2大俳優の豪華共演」も、私は寡聞にして知らない人ばかり。その解説を読んでも、なおさら知らないことばかりだ。

しかし、他方で「世界の片隅で生きる1人の少女に訪れた魔法のような4日間 今まで
にない全く新しい〈青春物語〉」の見出しを見ると、なるほど、こりゃ必見！

■□■ “驚異の新星” に注目！そのフレッシュさは？ ■□■

私は『ウエスト・サイド物語』(61年)や『エデンの東』(55年)を中・高校生時代に観たが、前者では、対立する不良グループに結集する若き移民たちの、社会に対する不満や鬱積が、後者では、父親への愛情を率直に表現できない繊細な精神を持った青年の、孤独な心が見事に表現されていた。それと同じように(?)、本作冒頭では、イギリスの海辺の田舎町を舞台に、父親のバグ(バリー・コーガン)の“再婚宣言”に反発する12歳の娘・ベイリー(ニキヤ・アダムズ)と、親に虐待されている子を救う“自警団”活動に精を出す異母兄・ハンター(ジェイソン・ブーダ)の姿に注目！アンドレア・アーノルド監督はこのベイリー役に“驚異の新星、ほぼ演技未経験”のニキヤ・アダムズを起用したが、残念ながらそのインパクトは『エデンの東』で初めてジェームス・ディーンを観た時の比ではない。そうすると、チラシの前述の見出しは少し誇大宣伝？

■□■ タイトルの意味は？バード役のドイツ人俳優に注目！ ■□■

私の大学時代は「ベトナム戦争反対！」をはじめとする政治的スローガンでの学生運動に揺れたが、フォークソングの世界では“反戦ソング”の他、森山良子の『この広い野原いっぱい』(67年)が大ヒットしたし、『今日の日はさようなら』(66年)もよく歌われていた。その2番の歌詞は、「空を飛ぶ 鳥のように 自由に生きる 今日の日はさようなら またあう日まで」だ。

本作はイギリス、アメリカ、フランス、ドイツ映画だが、メインはイギリス人の女性監督アンドレア・アーノルドによるイギリスを舞台にしたイギリス人俳優中心の作品だから、実質はイギリス映画だ。しかし、「バード」と題された本作の導入部では再三空を飛ぶ大きな鳥が映し出される上、父親に反発して家を飛び出したベイリーが、ある日、草原で服装も振る舞いも奇妙な謎の男・バードと出会う風景が描かれるので、それに注目！バード役を演じるのはドイツ人俳優フランツ・ロゴフスキだが、このバードとは一体何者？

そんな疑問を持つのは当然だが、「世界の片隅で生きる1人の少女に訪れた魔法のような4日間」を描く本作は、あくまでアンドレア・アーノルド監督のイメージを寓話にしたものだから、あまりそれを追及しない方がいいのかも・・・。

■□■ こんな暴君、こんな家庭でいいの？自警団の活動は？ ■□■

日本には、ベイリーの異母兄・ハンターが参加している自警団のような組織は存在しない。冒頭に見るその活動を見ていると、これはホントに地域に根差し、親に虐待されている子どもを救うためのもの？と疑わざるを得ない面もある。そもそも、ハンターにとって、何よりも親に虐待され救いを求めている子は妹のベイリーではないの？

他方、虫のタトゥーを体中に入れた父親バグ(バリー・コーガン)は、多少の可愛らしさはあるものの(?)、一方的に再婚を宣言し、一方的にベイリーとハンターに結婚式の付

き添い人を命令する姿を見ていると、こりゃ暴君そのもの。また、彼の年齢を考えると、離婚した最初の妻との間で最初の子供・ハンターを持ったのは彼が15、6歳の頃！？

そのことに文句をつける気はないが、あの若さで子供2人をどうやって養っているの？また、子供に一切相談をせず、知り合ったばかりの女との再婚を宣言するとは一体ナニ？彼の将来設計は大丈夫なの？そんなハチャメチャな父親こそ、自警団のハンターが退治しなければならない対象なのでは？そう思っていたが、アレレ、アレレ。ストーリーは寓話のような、おとぎ話のような、寓話のような展開に・・・。

■□■バードの父親探しの寓話にベイリーが大奮闘！■□■

子供時代なら、「むかしむかし、あるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました」と聞かされると、すぐにその情景を頭の中に描き、その後のストーリー展開に応じておじいさんとおばあさんの顔やキャラも想像できていた。したがって、仮にそのおじいさんが鬼（の化身）であっても驚かず、納得できていた。

しかし、青年期も壮年期も過ぎ老人になると、本作のように、導入部では大空を馳せていた鳥が、中盤からはバードと名乗る奇妙な姿をした男に変身してくると、そんな“寓話”についていくのは難しい。まして、ベイリーがそんな男の協力者になって、バードの父親探しの旅を手伝う“寓話”は、残念ながら、私の心に残るものにはならなかった。もともと、それはアンドレア・アーノルド監督が本作の製作に向けた意欲や、本作のストーリー構成が未熟だったためではなく、私の感性が衰えてしまったためだから、仕方なし！？

■□■意外な方向に急転換！結婚式でハッピーエンドに！？■□■

本作の導入部を見ていると、本作のストーリーの基本は、暴君のような父親のバグに対する12歳の娘ベイリーとその異母兄ハンターの反乱！私はそう思っていたが、もしそうだとすると、ベイリーとバードの寓話のようなストーリーは一体何のため？ベイリーがバードの父親探しの旅に協力する寓話の後、本作は意外にもハッピーエンドの方向に進んでいく。つまり、バードの父親探しの旅に協力してした後ベイリーは家に戻ったが、そこではバグの結婚式の準備が着々と進んでいたから、アレレ、アレレ。付添人の衣装も準備できていたが、ベイリーはそれを着て結婚式に参加するの？12歳の少女ベイリーの気持ち（の変化）が76歳の私にわかるはずもないが、スクリーン上では着々とその準備が進み、本作のクライマックスは幸せそうな結婚式の風景になっていくので、アレレ、アレレ。

なお、某映画紹介サイトによると、本作で注目すべきは、人気ロックバンドのフォンテインズD.C.が楽曲提供しただけでなく、ロック調の歌曲の数々や、父親の名前にちなんで発表された「バグ」が歌われることらしい。さらに、ワールドプレイの「Yellow」やブラーの「The Universal」など英国のアンセム的なヒット曲が効果的に使われており、エレクトロミュージックの大御所ブリアルが初めて映画音楽を担当したことも注目を集めたそうだが、私にその良さはさっぱりわからない。その意味では、基本的に76歳の私には本作の良さを理解することがムリ！？

2025（令和7）年9月18日記